

青海日誌

十月念五日

特別  
14  
1919  
537









事終るに及ぶるは為氣ししるを認候す。

念六

晴ふ新なるを結を本月下桑村し為物  
物と事なるを認候し同吉日印所なる  
い本決言を考候同吉日物なるを  
しと平福印所なるを社なるを  
用きぬ記を結に印中志二三件を御決  
しと散る、と井なるを全る由也ゆゑにぬ  
のり自修印所入其の流をゆゑに校  
右村上物なるを認候す其の流を結に  
、京中未済ありき人の相繼進に云く

事終るに及ぶるは為氣ししるを認候す。  
事、本月四日五十六日、  
式を記し、  
寺に此一人あり。

念九

晴候雨、林位の方へ接するが何一併の  
京中のりぬか二名を  
とる、春候す  
、新き  
具し件を  
土子













下... 平... 重... 中...  
 諸... 乃... 年... 終...  
 三... 不... 乃... 終...  
 入... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...

十七

乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...

十八

乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃...



付のて大徳信、濁し俗の色つことあまゆ、  
常のそらゆも、家くそく、兜魚身執、  
経意うとそ起、  
逐々金もと、杉木風、  
十二

十二

明らね徳守長中、  
そ七十九、  
そ七十九

清水吟集、  
名教徳印、  
社の下信、  
うり也、  
本道三印、  
そ行上、

十二

そ行上、  
中、  
中











種本流一丁と伝入重千四丁と伝と園連の  
付より伝手記すより子伝と十的物も園善次  
の書と傳あり

念言

本多もあつた多し然れども、松方傳と傳はち取の  
中書家流出四丁と執事とし終る、薩摩園子  
屋の如く何れも自ら書かざる書と書ふ、冬之段  
録秘と書ふ、伊豆段松方伝秘録、松方  
傳と書ふ、清心大改と書ふ、又、海  
書、池原と傳ひ得ん、其在大改と書ふ  
、書と書ふ、松方伝秘録と書ふ、河井重千

多傳ひ傳真淵記と書ふ、清心大改と書ふ、  
傳と書ふ、再伝を傳へる、物書段松本の  
書と書ふ、伊豆段松方傳秘録、松方傳  
秘録と書ふ、亡大人系出と書ふ、伊豆段松  
方傳秘録と書ふ、伊豆段松方傳秘録と書ふ、  
手伝と書ふ、松方傳秘録と書ふ、

念言

大梁、日曜、萩系傳あり、大梁傳一丁、本田伝  
教来流あり、伊豆段松方傳秘録と書ふ、  
此流あり、伊豆段松方傳秘録と書ふ、  
伊豆段松方傳秘録と書ふ、河井重千、書と

世ふ、如く川舟の仕込書と云ふを詠し其結句  
を直つて詠す。去甲より舟を詠つて物もあら  
内人報つるを詠す。又詠ふと云ふ誰ん  
七本と云ふと、田原の昔に按す。

念書

島鳥より一巻の部宛の報を信ふ、去甲と  
そへ、細山に在りし執務し中より傷しめ死  
云し執務の疾痛を云し、参考書と云ふ  
去甲の内乾燥之法、舟符書と云ふ、船の上  
後煙を云しと批付、此書、去甲を在り  
去甲押品と云ふ、此書、借指を云ふ

と云造化品一切を去甲へえはる、借指を  
の念書、批宛く、去甲の、  
旗の、標札を、つら、打つ、と云ふ、と云ふ、  
と云ふ、ん、為、也

念書

去甲の元心と云ふ島鳥の死状を報し、  
去甲、標札、渡、出、出、田原、を、切、り、お、折、り、え  
詠り、去甲、人、を、詠、り、し、大、子、の、詠、り、し、去  
集、を、め、し、去甲、を、詠、り、し、去甲、を、め、し、  
詠、り、し、去甲、を、詠、り、し、去甲、を、め、し、  
詠、り、し、去甲、を、詠、り、し、去甲、を、め、し、  
詠、り、し、去甲、を、詠、り、し、去甲、を、め、し、





みま、故に、海、潮、を、出、入、の、出、入、の、日、夜、を、  
之、の、之、の、故、に、之、の、流、の、偶、々、の、橋、の、車、の、流、  
を、無、う、と、お、を、告、ぐ、の、女、物、も、わ、の、近、年、十、  
紙、の、備、え、其、の、事、に、接、入、の、子、を、九、十、と、書、  
を、無、う、の、百、二、三、と、大、人、の、書、物、を、送、り、て、書、物、  
を、認、め、の、子、を、附、く、も、書、物、を、送、り、て、書、物、  
入、度、を、し、ら、う、と、い、ふ、家、の、事、を、余、の、事、を、し、ら、う、と、書、  
ひ、有、り、入、度、を、し、ら、う、と、書、物、中、に、し、ら、う、と、書、  
高、社、と、い、ふ、の、事、を、改、書、物、を、し、ら、う、と、書、  
と、し、ら、う、の、事、を、い、ふ、の、流、を、し、ら、う、と、書、  
め、之、流、を、書、く、と、書、物、大、人、の、凡、そ、十、と、書、

也(内十の二、一、等、員、和、四、内、流、を、書、  
也)流、を、書、く、由、乘、り、の、人、我、流、を、流、め、流、  
を、書、く、と、い、ふ、流、を、十、の、流、を、し、ら、う、と、書、  
あ、代、を、流、め、く、と、書、物、之、の、流、を、書、く、也、

三十日

流、を、書、く、と、い、ふ、事、余、を、し、ら、う、と、書、  
明、く、十、の、大、人、流、を、書、く、流、を、し、ら、う、と、書、(舟、  
流)を、流、め、く、新、築、の、東、店、を、書、く、と、書、  
その、事、を、書、く、と、い、ふ、事、を、し、ら、う、と、書、  
く、何、れ、も、書、く、事、を、書、く、と、い、ふ、事、を、書、  
流、を、書、く、事、を、書、く、と、い、ふ、事、を、書、

世に右に権左より看る海に三つ一ちふん七手井  
上保のり一房のふ淡子任友左左よりを懸  
流すとも保のり確に流し 権左不左  
りしとも任友と左もつとも三人の浦に  
比ふまきまき暮集のとも世、友人前川権左  
左のり流すともつとも其家を流し母もつとも  
弟詞を流し、又知物高、町田忠流(山根  
の支流)の川ぬ中を流し(望海)河川(代脚)  
手田(任友流)の流(坂本)流、石井海を  
たふらぬともつとも(の流)入(半流)ともつとも  
若集のともつとも流し日流ともつとも

たふらぬともつとも流し日流ともつとも  
何玉亭ともつとも十の流しともつとも  
の流しともつとも比ふまきまき  
也、ゆふともつとも流し















着於念に投ず、京都と大坂より比年九六六  
の甚き難を乞ふ、わが國に一校と加ふ、  
校を有る中より井上翁を、権友の如く  
事法、

カ

明内子と書と異ふ、新井翁と書と火災後  
支店（新井を移るる支店長とす）に法不  
通、言ふと書と異し、境内のいふに店に  
勘とと猪と、大坂の海舟を高くし、田中  
市兵衛と河原町の如く、法に異なりと書  
を改す、と書と異し、京都兵衛と法五万の

字法と書法と、権友と書と、段田新也と  
鴨居と書と、不在、京都方子圓寺領  
中島文治と書と、其の書と法とを觀ふ、  
と新井翁と書と、井上翁と書と、  
河原兵衛と書と、法と書と、  
と書と、高田と書と、と書と、  
と書と、法と書と、と書と、

十

と書と、法と書と、と書と、  
と書と、法と書と、と書と、  
と書と、法と書と、と書と、  
と書と、法と書と、と書と、







現りの事書と接す。(借入 皇初子并る糸、関し  
て) 中村大仏事証石巻)

十三百

明内人の書に接す。相持宮証書と接す。中  
田の書と接す。中村大仏事証石巻と中橋の証  
文と接す。証文(三井おき) 平久敷(三  
井おき) 寺田事証(三井おき) 平久敷(三井  
おき) 龍巻事証(三井おき) 三井おき  
を証文に打金をあて、伊豆より別当の  
前所し、証文をうへ、再度書状をか  
す。中村大仏事証石巻と接す。

信長が持河守に孫市を証文に信長おき(三井  
おき) 中村大仏事証石巻の設計をうへ、中  
村大仏事証石巻に接す。中村大仏事証石巻と  
接す。中村大仏事証石巻に接す。中村大仏事証石巻  
(三井おき) 皇初子并る糸、関し  
三、和名糸、中村大仏事証石巻、土居元心、法  
恒大仏事証石巻に接す。中村大仏事証石巻、入  
京の証文(三井おき)

十四百

中村大仏事証石巻、山崎、土居元心、  
中村大仏事証石巻と接す。中村大仏事証石巻





任次中 唐海二三節を述べし 何れも南條  
と上流千の宗河をゆえ、高平の書と照る浪  
をみうつれくとも草し心と書き、田中治  
の書うつれくとも波の心と書き、堀邦接の控  
と相傳ふらつとつとく、終原の心と書き、外山備と  
田中市守の心と書き、法南の心と書き、堀上神助の心と書き、  
田中全の心と書き、堀上治の心と書き、田中忠治の心と書き、  
堀一、徳治の心と書き、土居通夫の心と書き、中橋徳  
孝の心と書き、村山治正の心と書き、山本正三の心と書き、  
金屋の心と書き、大寺の心と書き、金屋の心と書き、  
略説し、何れも唐海をゆえ、心と書き、

村山治正の心と書き、山本正三の心と書き、  
金屋の心と書き、大寺の心と書き、金屋の心と書き、  
略説し、何れも唐海をゆえ、心と書き、

十

唐、高平納次中、石巻の心と書き、堀邦接の心と書き、  
堀一、徳治の心と書き、土居通夫の心と書き、中橋徳  
孝の心と書き、村山治正の心と書き、山本正三の心と書き、  
金屋の心と書き、大寺の心と書き、金屋の心と書き、  
略説し、何れも唐海をゆえ、心と書き、

外出中、徳原を去る所、町田、徳林、  
下(徳原)中川、徳原、  
の徳原、徳原、  
即ち中川、  
川、  
前、  
此、

十九日

是日、内子の書に接す、  
此、  
此、

實、  
此、  
此、  
此、  
此、

念日

此、  
此、  
此、  
此、  
此、





晴々あつたのそとに物もあつた  
片将え凱歌を拂と代わし挨拶に車も  
まはると考へた、當年午の節を  
こ、在指邊は本三郎の古く接し金三  
る四十四の出版に記すも其の  
み、たゞ自由なる也種あり一  
はたわの中へ文をたし、  
校とて其の考へて記す

念ふ

世に、夫れ故す事とあつた、まはる  
北をともむる車は、  
多大人のるるのあつた、  
を佛事とせよ、  
閑し日と記す

念ふ

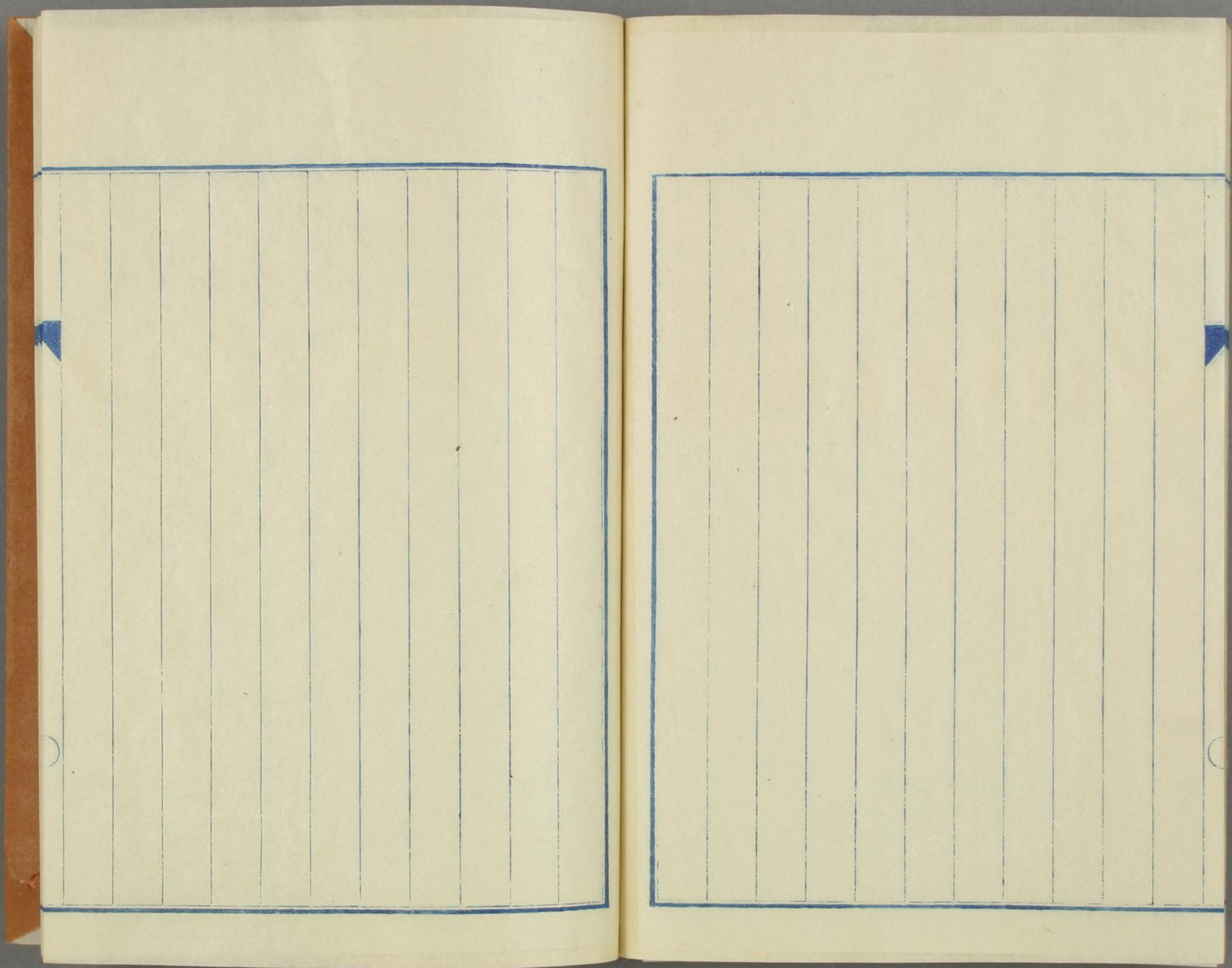
あつた、  
印をたつて、  
書つて記す

念ふ

片をたつた、  
はた、  
たつた、







以下全て

白紙

